

余の名、祖父が名付けたり。當人これを氣に入らず、その由來に聞く耳をもたざるに、他人の關心は少なからず、これまで耳にしたるその解釋亦多ければその典型を茲に列擧せむ。

父上八十一歳のお子なるやと問ひし人の小首を傾げ、ややありて、いやおぢい様の八十一歳の時のお子なるやと言ひ直し、なほ理に叶はざるを見ること少なからず。この説ひとへに山本五十六元帥の名これ父親五十六歳の子なる逸話に基づき、「いそろく」とキーボードに打ちたればたちどころに「五十六」と表示さるを見るにつけ、「やそいち」と打ちて何の應答もなし。已矣哉。

八月十一日生まれなるやと問ふは極めて素直な指摘にて、余の誕生日八月一日なれば、そを明かすことで、やはりさやうなりしかとお互い打ち解けてものごと丸く收まらんとするところ、余の性根やや氣難しければ顔色麗しからざるにや、おほかた半端なる會話にて終るを如何せむ。實のところ余は七月三十日の生まれなるを戸籍の登録が八月一日なれば、星占ひも何も正確さを缺くことこの上なく、さりとして、この名のために生誕日を變ふることも得ざりき。

八十一歳の長きに壽命を保ち得むと思ひきやと尋ぬるは昭和三十年代まで、すなはち余の子供の頃にしばしばありたるに、今日これを聞く機會絶えてなし。余生まれたる昭和二十六年、男の平均壽命史上初めて六十歳を超えたれば、當時にありて八十を超えて長生きせよとはまことに宜しなり。されどこれにうなづきたることなし。子供心に八十といふ年月のあまりの計り難きにそは永遠に生くることなるかと思ひたること記憶に残れり。

郷里の菩提寺に、戒名を位牌に刻むに俗名の一字を加ふる習ひあり。聊かの安直の誇りは免れ難きも、確かに戒名より俗名を類推するに便利なり。されど余、今から計りて我位牌に、八と十と一の文字を刻むこと罷りならぬと長男を前に力説するも、いづれ死後のことにて確たる保證の無きに、氣に入らざれば中有に永劫彷徨ひて成佛すること能はじ。さればこの名に相應しく、八十一歳の八月一日に身罷らむとせめば、位牌に八十一の文字莫くも特定容易ならまし。

清朝の皇帝服に大龍が咆哮せる意匠に詳細なる仕様あり。地の黄色は言ふに及ばず。四肢の先に鋭き爪の天地四方をさみ取らんとするにその數はいづれも一肢につき五本なり。大臣の龍の文様を用ゐる機會あらば、そは必ず三本にて五本とするは大逆なり。皇帝の鱗の枚數は八十一と定められ、他にこの數字を用ゐることは許されず。すなはち八十一は九九の最大數にて最聖數なればなり。余の名當に最聖數に由來しあるは、祖父余に名前負けせざるの努力をば命じたるらむ。